

『プロメテウスの罀』

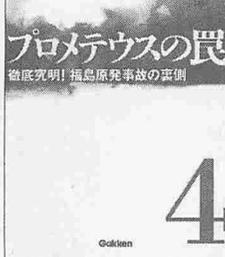
1巻から4巻

朝日新聞特別報道部著、学研マーケティング、各巻すべて1238円

天野 恵一

ここに紹介する「プロメテウスの罀」は、現在も『朝日新聞』に連載され続けている記事が単行本化されたものである。

〈3・11〉事故後、ゆつくりと「脱原発」を社説に宣言した、この大マスコミ（朝日新聞）は結局、原発再稼働をスタートさせるためにつくりだされた「原子力規制委」の「規制基準」を基本的には肯定的に評価する。現在の報道姿勢が端的に示すように、公然と電力資本の利害に加担する（原子力ムラ）メディアではなくなったものの、条件付きの原発推進メディアという性格を脱出できないでいる。こうしたウンザリする新聞のこの連載は、しかし、読みこたえのあるものである。夕刊への連載はすでに終了しているが、自社の報道を中心とする原発報道の歴史の再検証の作業である「原発とメディア」と、それとこの「プロメテウス」だけはいい、という声は私たちの身の回りではあふれていた。



本の紹介



「徹底究明！福島原発事故の裏側」のサブタイトル4巻が最近単行本化された（2012年10月23日から2013年2月11日、第19〜24シリーズ）。

チーム編成された特別報道部著の第1巻のサブタイトルは「明かされなかった福島原発事故の真実」。刊行は12年3月であった。その「はじめに」には、連載スタートのモチーフは以下のように書かれている。

「ひと月ほどして私たち朝日新聞は、あの時、福島で日本が何がおきていたのかに、もう一度肉薄し、同時にどうしてそうなってしまったのかに迫る長期連載を構想し始めました。事実を丹念に追うなかで、この世界史的事故の意味を問いたいと考えたからです。／原発は、戦後の日本が国策として決断し衆知を集めて作り上げ、万全の危機対策も誇ったはずの造営物です。電力は社会の近代化や成長の源であり、原発はまさに人々の生活を豊かにするためにつくられたはずです。／だが事故は防げず対応はもたつき、原発は人と社会に刃を向けました。原発の意味と歴史を知るわたしたちは、単に「人知の限界」「想定外」として済ませることはできません。科学技術への姿勢、政策決定の仕組み、政治や世論のあり方という戦後の日本社会の体質にも切り込まねばならないだろうという予感に満ちて、取材は始まりました。／原子力はときに、人間に『火』を与え文明をもたらしたとされるギリシャ神話のプロメテウスにちなみ『プロメテウス第二の火』と形容されます。／この火はしかし、人々にいったい何をもたらしたのか――連載「プロメテウスの罀」は2011年10月から朝日新聞紙上でスタートしました。分かりやすく事実をもって事態を語らしめようと、出来事の細部に徹底的にこだわって、ほぼ連日の掲載を続けています」。

〈3・11〉以後、連日、ショッキングな出来事が

大量に報道され続け、直後はその事件の恐ろしさに圧倒されてしまうような出来事でも、非日常的事件の日常化（報道）の中で、時間がたつた一つ一つの出来事は、やはり忘却されていつてしまう。この連載が単行本化されたものを、あらためて手にして、出来事の細部にこだわった、丹念な取材が、出来事を（最初に知らされた時の記憶と対比して）、まったく違つて見せてくれることを、実感する。隠されていた事実が明示されて視えてくることもあれば、明らかにならなかつた事実が、つきあわされることで、出来事の評価を逆転しなければならなくなるようなケースもある。第2巻（サブタイトル「検証！福島原発事故」、第3巻（サブタイトル「福島原発事故、新たな真実」）そして第4巻と続けられているのは事実の再検証のための、被害者の日常に即したこまかい取材である。

自民党の高市早苗政調会長が原発再稼働へ向け「原発事故によって死亡者がでている状況ではない」と発言したことがマスコミで話題になったのは6月19日のことである。福島県内での関連死が1415人とカウントされている日のことである。〈原子力ムラ〉の利害のために、つくりだされ続けている被害を見ないようにし、過去のことはすべて忘れようと努めれば、これだけハレンチなことを公言できる人間もでてくるのである。「忘却」に抗するには努力が必要なのだ。この4冊の本と、『朝日新聞』本紙に連載中の「プロメテウスの罀」は、私たちの、そうした努力のための、格好なテキストである。

（あまの・やすかず／本誌編集委員）